

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

# 「和華蘭」文化から着想 経年変化の過程も楽しめる

古賀 正裕 長崎/グラフィックデザイナー

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：LEXUS)が、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりにも挑む「匠」を応援する。

## レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏(建築家/東京大学教授)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発足。

昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやwebメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。



1月17日、丸の内センタービルにて



リア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの試作に取り組んだ。

1月17日に都内で行われた商談会では、百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて半年間をかけて製作した自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。また、商談会の終盤ではビームスジャパンとのコラボレーション企画「LIFE WITH NEW TAKUMI」(新しい匠、新しい暮らし)が発表されるなどプロジェクトも進化している。



「伝統を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。長崎県選出の匠、古賀正余裕の「匠名」さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。



スーパーバイザー 小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある

## 「守り、残し、伝える」デザイン 方向性で葛藤も

西彼長与町生まれのグラフィックデザイナー。農業を営む家の長男として生まれた古賀さんは、幼い頃から長崎の美しい自然と共に育った。「そんな背景もあってか、自然で誠実なデザインを心掛けている」と話す。現在は、子育てのしやすさに引かれて移住を決めたという西海市に家族と暮らす。周辺には同じように移住したクリエイターも多く、刺激を受けながら創作活動に取り組んでいるという。



パッケージや広告のデザインを通じたブランド構築のほか、雑誌、ウェブデザイン、展示設計など活動の幅は広い。自分の仕事を通して、人や社会にとって大切だと思う物事を「守り、残し、伝える」デザインを常に大事にしている。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECTでは、ベースの厚紙にさまざまな色やデザインの紙を貼り付ける「貼り箱」の技術を使った収納ボックスを企画。これまでの仕事で関わりのあった佐賀県有田町の紙器製造業「新堂」とタイアップし、磁石を埋め込むことで折りたたみを可能にした収納ボックスの制作に取り組んだ。ボックスの色は、江戸時代に長崎が世界の窓口だったことから育まれた「和華蘭」文化から着想。中国の五行思想やオランダの国旗などから、赤・青・黄・白・黒を基本色に採用した。「表面的な装飾デザインだけで終わらない、使い手の暮らしに溶け込むシンプルな

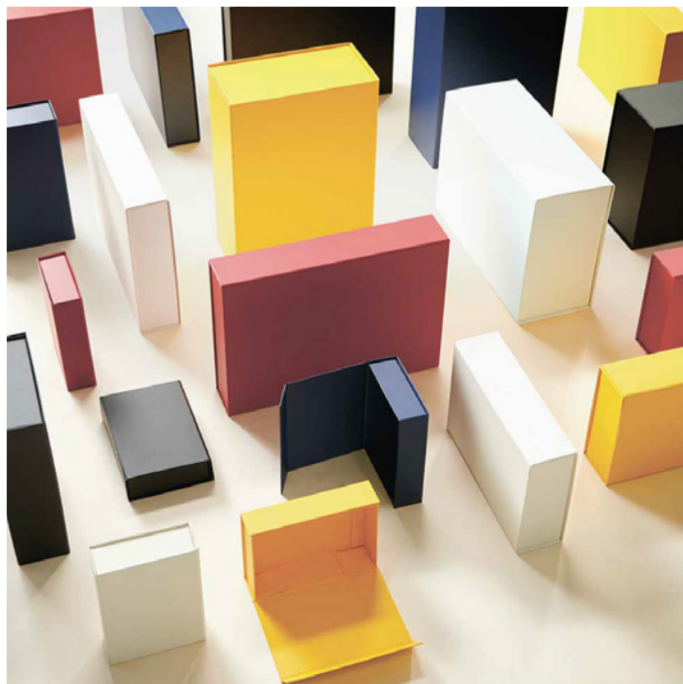
## 世界に向け販路開拓



今年2月にオランダでプロダクトをPRした時の様子

「紙」という素材を長く使ってもらうため、経年変化の過程も楽しめるよう工夫しては、「こいつ下川氏からのアドバイスを受け、収納ボックス表面に貼り付ける紙は色の付いた紙の上にさらに色を乗せるなど工夫。日常生活の中で使用するうちに傷が付いても下地の色を楽しめるようにした。また、職人が一枚ずつ手刷りするシルク印刷の紙にすることで全体の質感を向上。長崎伝統の風「ハタ」に見られる和紙に塗られたような落ち着きのある赤「佐賀名産の有田焼」に見られる、濃い藍色のような青「なま」理想の色味も追究した。「紙の接ぎ目が目立たないよう工夫するなど、全ての工程で人の手が入るこだわりの詰まったプロダクトに仕上がったという。」

2018年1月17日に東京で開かれたプレゼンテーションの前には、一新堂の職人が一丸となってプロダクトを準備。「こちらの難しい要求に対して職人さん側から『こういうやり方にしてはどうか』と提案されることもあった。初



古賀さんが手掛けた「ISSHINDO FOLDING BOX」

デザインを目指したという。ただ、デザインの方向性については葛藤に苦しんだ。当初のシンプルな物を表現したいとの思いの一方、「グラフィックデザイナーとして参加した自分には、もっと装飾的な物が求められているのではないか」との思いもあった。そんな中迎えた2017年9月のエリア・コンサルティングでは、地域性を色に特化して表現するという当初のアイデアを下川氏にぶつけた。「結



エリア・コンサルティングで下川氏(左)との一枚

向けられるようになったことも、大きな収穫だったという。地方の中小企業でもアイデア次第で世界に飛び出すことができるという実例を作れた。

今回の貴重な経験を通して生まれた多くの方との出会いを生かしていきたいよう、自分たちもワクワクしながら進んでいきたいと語った。



古賀 正裕 長崎/グラフィックデザイナー

1982年長崎県生まれ。印刷会社、広告代理店、農事組合法人を経て、2011年独立。ヒアリングを中心としたコンセプト設計から、シンボルマーク開発、広告デザインなどを行う。長崎デザイナーズバンク登録デザイナー。長崎デザインアワード2016長崎賞、NIPPONの47人 2015 GRAPHIC DESIGN選出、など

